

山道を辿って 李晴

あれは雨がよく降る季節だった。私が巡鎮中学（高等中学、日本の高校に相当）への入学通知書もらった時、巡鎮へ行く道は雨水で崩され何日も車の往来が出来なかった。8月（農曆）の村はもう充分秋の気配が深まっていた。

私は家の門のところに佇み、ぼんやりとした靄の向こうの、村の入り口へ通じる道を眺めていた。それはごくありふれた石の道で、天気の良い日には1日1回、陽方口から河曲へバスが通っていた。真っ赤な車体と真っ白な屋根はとても鮮やかで美しかった。しかし、あの雨の多かった8月はすべてが暗く、不鮮明で、気のふさがるような毎日だった。入学手続きの日からもう10日は経っていたが、どんよりと重苦しきの立ち込める空には依然として一筋の光すら見えなかった：雨、速くもなければゆっくりでもなく、ただ、ただ、降ってくる雨。ちょうど何もかも策が尽きようとしていた時、家の者が、役場から車が出て遠回りをして河曲へ行くと言ってきた。母はすぐに私をその車に乗せて巡鎮へ行かせることにした。

私の村から巡鎮までは約100里（約50km）もあり、母は私を独りで行かせることをとても心配していた。しかしどうしようもないことだった。当時私の父は軍人として遠く離れたところにおり、祖父は生来とても内気で人と話をする事が出来ず、家から遠く離れることなど出来ることではなかった。曾祖父はといえば、頭脳明晰で実行力に富んだ人であり、若い頃には外へ出てあちこちで働いたこともあったが、もうすでに80才を越え、充分老人の域に達していた。

そんな雨の降るある日、どうやって荷物を持って役場まで行ったのかはっきりとは思い出せないが、私のやって来るのを待っていた車はすでにブルンブルンと音をたてエンジンをかけ、広く水を被っている道の端に停まっていた。今思い起こしてみると、あの時曾祖父がずっと私を役場まで送ってきてくれていたのだった。私が車に乗り込むとき、曾祖父は「雲雲（私の幼名：彩雲）、姥姥（ラオラオ）はここまでしか送らないが、大丈夫だな、ん？」と私に切々と話し掛けた。曾祖父のことを私は土地の習慣から姥姥と呼んでいたのだ。

曾祖父は車の周りを往ったり来たりしながら運転手と世間話をしていた。私が巡鎮へ行くということを聞いた運転手は驚いて「この車は巡鎮へは行かないよ、途中で河曲へまがるんだ」と言った。それを聞いた途端、私はぼう然とし、ただ足下の大きな荷物を見つめるばかりだった。曾祖父は素早くさっと車に乗り込み運転手に向かって言った。「少しでも行ければそれでいいよ、曲がるところに来たら車を降りる。残りの10里や20里なんて歩いてもたいしたことはいさ」。そうして曾祖父は私の側に来て腰を下ろした。

車が動き出した時、雨はまだ降っていた。斜めに降ってくる雨の糸は車の窓ガラスの上を音もなく軽く叩いていた。曾祖父と一緒に来てくれることになり、私は密かにホッとした。父が軍役で家を空けてから10数年、日頃母は私を可愛がり大切にしてくれたが、しかし時には年の若い母にとって思うようには事が行かないこともあった。

とりわけ私が小学校に上がったはじめの2年は毎日送り迎えの人間が必要だった。母は病気がちで、おまけに幼い妹もいたため、私を送り迎え出来るのは曾祖父しかいなかった。夏の真昼、外は焼けるような暑い陽射しの頃、ひんやりと涼しいオンドルの上でぐっすりと昼寝をしていると、ジーッと学校から授業開始の予鈴が聞こえてくる。私はコロコロッとオンドルの上を転がり、起き上がり、泣き始める。遅刻をするのではないかとビクビクし、泣きながら学校へ走って行ったものだった。よく靴が脱げ、手にぶら下げて裸足で学校へ行った。

私はまたとても怖がりだったので、分かれ道や、軒の下、樹の根元などにはいつも何かが潜んでいるのではないかと思っていた。ひたすらまっすぐ、頭を下げ、振り返りもせず一気に学校へと走ってゆき、校門にある大きな榆の木の下に着くと、やっと後ろを振り返ってみることが出来た。そしていつも曾祖父の見慣れた小さな体が、私の後ろのそう遠くない所でゆっくりと揺れ動いているのが見えたのだった。明らかに私を送ってきてくれたのだが、曾祖父はまるで関係なくブラブラ歩きをしているように振舞っていた。そんな曾祖父の様子を見かけると村の人はいつも面白がって「ひ孫のことまでも、まだ面倒見なきやいけないのかい？」とからかった。

曾祖父は恥ずかしそうに笑ってくちごもり「この小さな足跡を見に来たのさ、肥った……」。曾祖父は私の足跡を辿りながら学校までやって来たのだった。冬になり雪が降ると、曾祖父は必ず早く起きて私のために道を掃いてくれたものだ、家の門から学校までずっと。高校に合格し、

10幾つにもなった人間が、まだ曾祖父に送ってもらわなければならないとは思ひもしなかった。

遠回りをして行くうちに、足下の道は黒々とした平らな幅の広い道になっていた。私達の乗った車はとても大きな車輻だったが、私と曾祖父を除くと他には運転手と役場の司書しか乗っていなかった。車の中は寒々とし、車の外はそぼ降る雨でぼんやりとしていた。道の両側の高い青緑色の楊柳が一行、一行と後ろへ倒れてゆく。遠くの黛青（濃い青）色の山々がまるで羽を伸ばしているかのようにフワッと私達の方へ飛んでくる。

曾祖父は緊張して口を堅く閉じ、一言も話さない。しかし私には曾祖父が内心誇らしく、また些か興奮しているのがわかった。案の定、車が五門楼を過ぎると、曾祖父は饒舌になってきた。いつときすると私に陽面に着いたと言い、またしばらくすると龍門溝にやって来たと教えてくれた。若い頃、曾祖父が出稼ぎに行くたびに通った幾筋もの道。大昔、周の時代に天子が諸侯を試して狼煙を上げた時、最も高く、勢いよく上げた烽火台……。

旧県を少し過ぎると突然大きな河が目の前に現れた。ゆったりとした河床、平で広々とし、向こう岸まで目が届かない、ゆるやかに流れる水。まるで一条の黄褐色の緞子の帯のようであり、靄のような細かい雨の中では一片の煙のような雲かともおもえる。「雲雲、これが黄河だ、河のあつちは陝西省、向こうは内蒙古……」曾祖父は興奮気味に私に教えた。車は黄河に沿って走った。河の面にはポツンポツンと小舟が浮かび、木の葉のようでもあった。河の水は溢れ出て道路にまで達しており、車は水の浅いと

ころをゆっくりと滑るように通って行った。広大で果てのない黄河の水は私達の足下からまっすぐに対岸の遠い山に連なり、そして遠い山の峰は天まで届かんばかりであった。

私達が車を降りた時にはもう正午ちかくになっていた。人に尋ねてやっと私達が巡鎮にそう遠くない7、8里のところまで来ていることを知った。雨はすでに止み、アスファルトの道路はぐっしょりと濡れていた。私と曾祖父は荷物を背負い、一步一步巡鎮に向って行った。私は小さな包みを背負い、手には洗面器や食器などを詰めた大きな網袋を下げている。曾祖父は布団包みを背負った。歩き始めの頃は、曾祖父はまだ落ち着いた早い足取りで歩いていた。私は一生懸命歩いてやっとついて行ったのだった。

やがてだんだんと曾祖父の歩みは緩慢になってきた。なんとといっても80才の老人である。布団包みの中には毛布や、敷布団、掛け布団ばかりでなく、替えの衣類や、携帯食料、それにたくさんのお酒まで、全部で6~70斤(30~35kg)はあったらどうか。布団包みはだんだんと弛んできて下へずり落ちていった。曾祖父は歩いては止まり、歩いては止まりしながら布団包みを揺すりあげていったが、布団包みを結わえている縄の端は地面を引きずっていた。わたしはといえばもうとっくに動けなくなっていた。

いつも山道を歩くときには8里や10里ぐらいは飛び跳ねるように歩いていたものだが、その日真っ平らで広い舗装道路に行くことは、行けば行くほど先が遠く感じられ、歩けば歩くほど疲れるものだった。私はもう腰をおろして休みたかった。しかし、曾祖父はかえってゆっくりと一步一步前へ進んで行き、一休みしようなどとは

考えもしなかったようだ。私は仕方なくその後をついて行った。私の目の前にはただ小山のような布団包みと前になり後ろになる曾祖父の両脚だけがあった。

ついに巡鎮中学の門が見えてきた。門の前には小さな白い橋がかかり、橋を渡ろうとした私と曾祖父は運動場で体操をしていた学生達に取り囲まれた。曾祖父は力を振り絞って前へ進もうとし、私はその後ろで、もう落ちんばかりになっていた布団包みを支えていた。学生達もその後ろについてきた。まっすぐに教務課の入り口に着くと、曾祖父はやっと布団包みを下ろした。曾祖父は汗を吹きながら周りを囲んでいる学生達に言った。「私は今80才だ、これは私のひ孫の…」。やや自慢げな表情であった。

その夜、曾祖父は学生寮に泊まった。私達の宿舎は全員15、6才の女子で、皆、曾祖父を姥姥と呼び親切にしてくれた。その翌日朝早く、曾祖父が起きだして持参した食べ物を食べ、帰り支度をしていると、同室の王素娥があからさまに不機嫌な態度を示した。彼女によると、昨夜は曾祖父のいびきと部屋にたちこめた田舎の年寄りの汗臭さとで一睡も出来なかったのだそうだ。彼女は曲峪の出身で、自分ではいづらか都会人とでも思っていたのだろう。私は始めから終わりまで一言も口をきかなかった。救われたのは、曾祖父の耳が遠く、彼女が誰を罵っていたのかよく聞こえなかったことだった。

その日、曾祖父はひたすら歩いて戻ったのだった。100里もの道のりを、丸々一日かかって。家にやっとたどり着いたのは夜もだいぶ更けたころだった。(岩田温子訳) (2000年2月号より)